

ZOCALO²⁰²⁵10▶12

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

野島康三と斎藤与里

日本近代美術を支えた埼玉県ゆかりの二人の作家の眼差し

企画展「野島康三と斎藤与里 一美を掴む手、美を興す眼」
2025年11月1日(土) ～ 2026年1月18日(日)

写真家・野島康三(のじま やすぞう・1889-1964)と洋画家・斎藤与里(さいとう より・1885-1959)。ともに埼玉県に生まれた二人は大正期から昭和中期にかけて制作者として創作を行う一方で、画廊経営者やコレクター、あるいは、評論家や教育者として同時代美術を支えたプロモーターとしても知られています。企画展「野島康三と斎藤与里 一美を掴む手、美を興す眼」では、大正期における二人の交流にも着目し、近代美術史、写真史に足跡を残した両者の仕事を紹介します。斎藤の活動を回顧する当館の企画展は「斎藤与里とその時代」(1990年)以来35年ぶり、野島については、当館で作品と活動をまとまった規模で紹介する初めての機会となります。

斎藤与里は埼玉県北埼玉郡樋遭川村(現・加須市)に生まれました。画家を志した斎藤は、京都で浅井忠と鹿子木孟郎のもとに学び、1906年から2年間フランスに留学すると、現地で同時代の西洋の美術動向に触れました。帰国後は、『白樺』や『早稲田文学』などの雑誌や新聞に、自身の感覚や感情を重視する新しい傾向の芸術思潮を紹介するとともに、ヒュウザン会(1912年)や日本美術家協会(1916年)など美術家たちのグループの結成も主導します。フォービズムやポスト印象主義、象徴主義などを咀嚼した作品を発表し、新進画家として注目を集めると、1915(大正4)年に《朝》が第9回文部省美術展覧会で入選、翌年には《収穫》で特選を受賞するなど文展でも活躍しました。

野島康三は埼玉県浦和市(現・さいたま市)に銀行家の長男として生まれ、慶應義塾在学中に写真の制作を始めました。野島は東京で写真館を運営しながら、明治後期に創立された写真団体・東京写真研究会に参加し、同会の展覧会(研展)にも出品します。当時の東京写真研究会では、絵画からの影響を受け、美術的な表現を志向した「芸術写真」と呼ばれる動向が興隆していました。そうした中、野島は独自の表現を追求し、1920(大正9)年には第10回研展の一室でそれまで制作された作品から約30点を自選した個展を開催し、大きな反響を呼びました。

野島と斎藤の交友は、大正初期、野島が斎藤に絵画の指導を受けたことから始まったといえます。斎藤とその周辺の美術動向は、野島の写真制作にも大きな刺激となったと考えられます。情感豊かな風景や女性像、モデルに肉迫する



野島康三《Y君肖像》1920年
ガム・プリント、渋谷区立松涛美術館蔵

ようなポートレートなど、野島の初期の制作は、絵画から刺激を受けつつも「絵のやうな写真だなどと云はれて嬉しがっている」(1)というように、写真には写真の世界があります。写真ならではの表現を深めるものでした。

両者の交流が実を結んだ成果としてとりわけ注目されるのが、1919(大正8)年5月に設立された画廊・兜屋画堂(かぶとやがどう)であるといえるでしょう。『白樺』などを愛読し美術を愛好していた野島は同時代の美術と美術家を支援する場を創設することを構想していました。画家の紹介や展覧会のディレクションなどで野島に協力した斎藤にとっても、単なる商品として美術作品を売買するだけではなく、最先端の画家や美術の動向を紹介し、美術家たちの交流や支援の場となる画廊は理想とする展示空間でした。

兜屋画堂は野島と斎藤を中心に多くの洋画家や工芸家、彫刻家が運営に関わり、1年余りの短い活動期間に、中川一政や林俊衛など新進作家の個展、夭折した関根正二と村山槐多の遺作展、ロダンによるデッサンの複製画、児童が描いた自由画など様々な展覧会が開かれました。「採光や其の他の設備の行き届いた小じんまりとした感じのいい画堂の欲しいと云ふことは誰も考へてゐたことである。(中略)兜屋画堂と云ふのは斎藤与里氏等の斡旋で美術愛好家の野島熙正[引用者注:野島の号]氏によって、神田の東京堂の筋向に作られた新しい画堂である。中井銀行とかに手を入れたものだと云ふ話であるが、銀行であっただけに下の凹字形になってゐる土間などは造作をした跡が少なくて非常に感じがいい、採光の具合もどうかと思はれるが、電燈などにもかなり注意が加へられてゐる。(中略)何

より設立者の画界に対する好意を有難く思ふ。」(2)とも言及された兜屋画堂は、空間の設えから活動方針まで、野島や斎藤の理想主義的なヴィジョンが反映されていたようです。

その後の野島と斎藤は、どのような足跡を辿ったのでしょうか。

野島康三は大正後期から昭和期にかけて様々な美術家と交流を重ね、コレクターとして作品を蒐集したほか、自邸での展覧会や美術関連の出版物の撮影の仕事を手がけるなどその活動を支援していきました。例えば野島は1922(大正11)年、萬鉄五郎の日本画展覧会を開催し、1927(昭和2)年に萬が亡くなった時点では多くの作品を所有していました。戦前野島が手元に置いたコレクションには、岸田劉生《川幡正光氏之肖像》(1918年)や村山槐多《バラと少女》(1917年)など、こんにち作家の重要作と位置付けられる作品も含まれています。



野島康三《萬鉄五郎氏展覧会写真》1922年
ゼラチン・シルバー・プリント、京都国立近代美術館蔵

1930年代に入るとドイツの写真の動向の影響も受け、野島の制作はゼラチン・シルバー・プリントを用いて、女性の顔を大胆に切り取った連作「女の顔」などの新たな展開へと移行します。さらに、そうした新しい写真表現の発表の場として、1932(昭和7)年、野島、木村伊兵衛、中山岩太が同人となり、写真雑誌『光画』が刊行されます。野島は1930年代から40年代にかけて『光画』や日本写真会、国画会写真部などにも作品を発表しました。戦時下においても国策的なプロパガンダや報道写真とは距離を置きつつ、静物や女性をモチーフに人工的な光の演出を施して構成した「ぎんれい花」シリーズなどで独自のイメージの探求



▶ 斎藤与里《朝》1915年
油彩・カンヴァス
埼玉県立近代美術館蔵



◀ 野島康三《慈姑の図》1927年
プロムオイル・プリント
京都国立近代美術館蔵

を続けました。

一方、斎藤は1919(大正8)年、新たに創刊された『大正日日新聞』に学芸部記者として迎えられ大阪に移住しましたが、同紙はわずか1年で廃刊してしまいます。その後1937(昭和12)年に再び東京に転居するまで大阪を拠点に活動し、1924(大正13)年に日本画家・矢野橋村が設立した大阪美術学校の洋画部教授となるなど教育にも力を注ぎました。

美術教育や槐樹社、東光会など美術団体の運営、美術雑誌『美術評論』の主幹など、大阪時代の斎藤は評論家や教育者として美術や文化の振興と普及に携わる一方、南画や東洋美術の要素を取り入れた闊達な描線と明るい色調、装飾性を備えた表現によって日本に根差した油彩表現を掘り下げていきます。第8回帝国美術展覧会で特選を受賞した《水郷の夏》(1927年)を端緒に、農民や労働者をモチーフにした大作を帝展に連続して出品すると、農村の生活風景は重要な主題となりました。戦争を機に郷里の加須に戻り、晩年は故郷を題材に童画を思わせる伸びやかな作風を確立しました。

野島と斎藤はともに、生涯にわたり、表現者として美を“掴む”ことと、同時代の美術の支援者として美を“興す”ことという両輪によって理想の芸術を追求し続けた作家であるといえるでしょう。展覧会では、野島と斎藤の代表作に加えて、岸田劉生、萬鉄五郎、関根正二など、二人と交流のあった美術家や兜屋画堂で紹介された画家の作品、関連資料なども紹介します。埼玉県ゆかりの両者の活動を通して大正から昭和期の美術を見直す機会となれば幸いです。(S.H.)

(1) 野島熙正「朱雪雜記」『写真月報』第25巻第3号、1920年3月
(2) 「兜屋画堂の設立」『美術画報』第42編第8巻、1919年6月



斎藤与里《秋海棠》1950年
油彩・カンヴァス、加須市蔵

MOMASの動物園

MOMASコレクション
2025年9月6日(土) ～ 11月30日(日)

美術作品に登場する動物たちを集めた「動物園」が、MOMASコレクションに開園します。美術家たちはいかに動物の存在をとらえ、作品に表してきたのでしょうか。埼玉ゆかりの美術家たちによる動物の表現を少しだけご紹介し

まずは、《五月の花嫁》(①)を見てみましょう。牧場に集う牛たちと、フォーマルな服装に身を包んだ人々。真ん中にいる2頭の牛は花や植物でおめかししています。手前に立っているのは聖書を持った神父でしょうか。どうやら牛たちは結婚の誓いを交わしている様子です。牛の結婚式という不思議な光景をおかしみをもって描いた、ユニークな作品です。

この作品を描いた小松崎邦雄(1931-1992)は、少年時代を浦和で過ごしました。家の近くには牧場があり、牛が身近にいる環境でした。県立浦和高校を卒業して東京藝術大学で学び、東京で画家としての活動を始めましたが、1961年に浦和に戻り、別所沼近くにあった牧場で再び牛と出会

いました。乳牛の白黒の形の面白さに惹かれた小松崎は、この時期から1970年頃まで繰り返し牛を描き続け、「牛庵」と名乗ることもありました。小松崎の描く牛たちは、現実の牛とはどこか違っており、「これは人間の目だね」と言われることもあったといえます。小松崎は実際の牛を描いたのではなく、「牛の形をした自分だった気がしています」と振り返っています(註)。

埼玉大学で教鞭をとった吉岡正人(1953-)は、初期ルネサンス絵画を思わせる空間のなかに、人物、建物、白い馬や犬を配した、静謐で幻想的な作風で知られます。《旅(彼の地まで)》(②)では、地平線が高くとりたれ、荒涼とした大地が広がっています。人物とともにたたずむ馬は、私たちを精神世界の旅に誘う同伴者にも思われます。

ここまで油彩による作品を紹介してきましたが、当館の収蔵品において動物が多く登場するジャンルは、「花鳥画」の伝統をもつ日本画です。加須市出身の菊沢武江(1882-1975)は、自宅で飼っていた鶏や動物園の猿など、

動物の丁寧な写生を行いました。《みやまの春》(③)は、武江が画壇での地歩を固めた昭和初期の代表作のひとつです。対象に向き合う誠実な態度が、穏健で調和のとれた画面に結実しています。

内藤五琅(1948-)は、浦和高校、東京藝術大学で学び、院展を中心に活動する日本画家です。学生時代に冬の不忍池で見たカモに惹かれたことがきっかけで、現在まで日本や世界の野鳥を描き続けています。《雪橋》(④)では、雪の降りしきる水辺で休息するオナガガモが描かれ、抑えた色調が厳しい自然のなかで生きる野鳥の美しさを際立たせます。日本野鳥の会の特別会員でもあるという内藤は、種の特徴や生態を確かな観察眼でとらえています。

展示室にはこのほかにも、身近な動物から想像上の動物まで、たくさんの動物たちが勢ぞろいします。「動物園」を巡りながら、美術家たちが動物に向けたまなざしにふれてみてください。(S.Aya.)

(註)『NHK趣味講座 油絵入門』日本放送協会、1985年、58頁



① 小松崎邦雄《五月の花嫁》1965年、油彩・カンヴァス



② 吉岡正人《旅(彼の地まで)》1990年
油彩・石膏地カンヴァス



③ 菊沢武江《みやまの春》1930年
紙本着色(前期展示)
紙本着色(後期展示)



④ 内藤五琅《雪橋》2003年、紙本着色(後期展示)